

1 2	知教連 (東浦町)	○北部中 サクラギ 櫻木 ユウジ 優詞 藤江小 加古 媛子 生路小 鶴田莉々佳 片葩小 山川 千尋 石浜西小 森下 浩平 緒川小 小田 雅 卯ノ里小 長谷川大輔 森岡小 高橋 理玖 森岡小 畑中 聡 東浦中 田川 皓大 西部中 花井 求樹			
分科会番号	1 3	分科会名	能力・発達・学習と評価		

主体的に学ぶことができる児童生徒の育成 ～学びを調整し、多様な考えに触れる学習環境の充実を通して～

1 主題設定の理由

現在の学習指導要領では主体的に学習に取り組む態度について「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の2つの側面から評価すると示されており、教師にはこれら2つの力を育成することが求められている。さらに、確かな学力をつけるために指導の個別化や学習の個性化といった「個別最適な学び」が一層重視されるようになり、指導方法や指導体制の工夫改善を図ることが求められている。令和3年の中央教育審議会の答申では、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を目指すことが提言されている。

東浦町では、令和元年度より研究主題を「主体的に学ぶことができる児童生徒の育成」とし、対話的な活動やICT機器の活用、「個別最適な学びと協働的な学び」について研究を進めてきた。昨年度は、「学習の内容・方法を子どもに委ね、主体的・対話的で深い学び」の実践を行った。その成果として、学習の内容や方法を児童生徒に委ねることで、自らの学びに適した学習方法を選択する場面など、児童生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られた。一方で、課題追究の場面では、同じ情報元から調べている場合が多く、更なる学習課題の追究に適したタブレット端末の使用法を考える必要性が出てきた。また、協働的な学びを深めるための具体的な手だての検証も今後の課題である。

そこで、令和8年度の研究では、個別最適な学びと協働的な学びの視点を生かし、考えを深める授業を通して、主体的に学ぶ児童生徒の育成を目指していくこととした。個に応じた学びを実現するためにICT機器を効果的に活用した学習を行い、主体的・対話的で深い学びを展開する。併せて、既習事項や他者の考えと関連付けながら、自らの考えを再構成するなど、児童生徒の学びを深めるための対話の在り方や考えを比較し深めるための授業展開の工夫にも取り組むこととした。

2 研究の構想

(1) 目指す児童生徒像

主体的に学ぶことができる児童生徒

(2) 研究の仮説

仮説1 単元全体を通して、児童生徒が自ら学習の内容や方法を選択し、振り返りを通して学習の方法や過程を見直し、次の学びを調整する場面を位置付ければ、主体的に学びに向かう力が育つだろう。

仮説2 多様な考えに触れ、根拠に基づいて比較・検討する対話の場を単元に位置付け
れば、互いの考えを生かしながら学びを深める力が育つだろう。

(3) 研究の手だて

A（仮説1に対して）

- ・児童生徒が自ら学習の内容や方法を選択・判断する場面を単元の中に位置付ける。
- ・単元全体の学習内容や目標を明確に示し、学習の見通しをもたせる。
- ・児童生徒が自らの課題に応じた学びに向かう時間を十分に確保する。
- ・振り返りの視点を示し、自らの学びを見直し調整する場を設定する。

B（仮説2に対して）

- ・多様な考えを可視化・共有・比較できるようICT機器や資料を活用するなど、学習を刺激（意欲化）し、促進（学習材）する学習環境を構成する。
- ・児童生徒が対話を通して他者の考えとの共通点や相違点を明確にし、自らの考えを見直し、深めることができる場を設定する。

3 研究の実践と考察

(1) 実践1 小学6年生

① 教科 理科 「人や他の動物の体」

② 学級の実態

これまで学習には意欲的に取り組むものの、自ら学習方法や表現方法を選択し、自分の学びを調整しながら学習を進める姿は十分には見られなかった。また、自信をもって自分の考えを発表することに苦手意識をもつ児童も多く、自らの考えを適切に表現することに課題が見られた。

③ 具体的な手だて

児童が単元全体の見通しをもち、自ら学びを調整するとともに、多様な考えに触れながら学習を深めることができるよう、学習環境を構成した。

ア 手だてAについて

単元の導入時に、単元全体の学習内容や各時間の目標を示したオリエンテーションシートを配付し、児童が単元の見通しをもち、学習進度や目標を意識しながら、自ら学習方法や表現方法を選択できるようにした。毎時間の振り返りでは、自らの学習状況を見直し、次時の学習内容や学習方法を選択・判断しながら、自らの学びを調整するよう促した。教師は振り返りシートにアドバイスを朱書きして返却した。

イ 手だてBについて

児童が自ら選択した学習方法や表現方法に応じて学習を進められるよう、図書や模型など複数の教材を準備し、タブレット端末以外にも情報収集できるようにした。オリエンテーションシートには、まとめ方や発表方法の例を示した。教室には、児童が自分に合った方法で学習成果を表現できるよう、表現方法に応じた教材や材料を準備した。

④ 授業の様子

単元の導入では、学習内容や振り返りの視点を示したオリエンテーションシートを配付し、学習課題「人やほかの動物の体について知り、からだ博士になろう」と、第10・11時に行う発表活動について説明し、児童が単元全体の見通しをもちながら学習を進められるようにした。課題追究では、児童がタブレット端末や図書、模型などから情報を収集し、自ら選択した方法で学習成果をまとめる姿が見られた。児童Aは、「日本人と欧

米人の体のつくりの違い」をテーマに学習を進めた。骨格の違いを調べる中で、その要因が食生活や生活様式にあることを知り、次時にさらに詳しく調べることを計画した。振り返りにも「人間の70%は水だけど、残りの30%はどうか気になった。」と記述し、生じた疑問を次時の学習につなげようとしていた。学習内容を友達に分かりやすく伝えるため、クイズ形式のスライドを作成するな

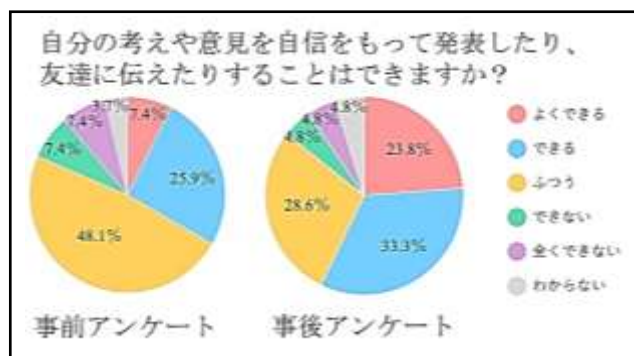


【物的環境を活用して学ぶ児童】

ど、発表方法にも工夫が見られた。毎時間の振り返りでは、新たな疑問や次時に取り組む内容についても記述するよう視点を示した。児童は振り返りを基に次時の学習内容や発表資料の作成計画を考え、教師は朱書きによる助言を通して、児童の学習への取組を支援した。一人で学習を進めることに不安を感じていた児童Bは、理解が難しい内容に出合った際、同じグループの児童から「画像を長押しすると『調べる』が出るよ」と助言を受け、端末の機能を活用していた。自分が理解した内容を相手に説明する姿も見られ、必要に応じて周囲の力を活用しながら学習を進めていた。発表では、児童が自ら選択した方法で学習成果を伝えた。聞き手には、発表用メモや感想記入カードを活用し、他者の考えや表現方法を記録するよう促した。発表後は、記入した内容をロイロノート・スクール（株式会社 Loilo、以下「ロイロノート」と表記）の提出箱で共有し、互いの考えや表現方法を比較できるようにした。

⑤ 実践1の成果

単元の導入時に実施したアンケートでは、「自分の考えや意見を自信をもって発信することはできますか」という質問に「よくできる」「できる」と回答した児童は33.3%であったが、単元終了後には57.1%まで増加した。オリエンテーションシートと毎時間の振り返りを組み合わせたこ



【アンケートの結果】

とで、児童が学習内容や方法、表現方法を選択・調整しながら学習を進める姿が見られた。児童Aは、振り返りを基に新たな課題を設定し、次時の学習内容や発表方法を自ら考えていた。児童Bは、必要に応じて友達の助言を取り入れ、自分に合った方法で課題を解決していた。これらの姿から、他者の支援を活用することも、学びを調整する一つの姿として捉えることができる。単元全体の見通しをもたせることと、毎時間の振り返りを通して学習を調整する場を設定したことは、児童が自ら学習内容や学習方法、表現方法を選択しながら主体的に学習を進めることにつながった。自分に合った方法で学習成果を表現する経験を積み重ねたことは、発表への自信の向上につながるとともに、主体的に学習を進める態度の育成にもつながったと考えられる。

⑥ 実践1の課題

本実践では、オリエンテーションシートや毎時間の振り返りを通して、児童が自ら学習内容や学習方法を調整しながら学習を進める姿が見られた。一方で、今回の実践では児童によって学習の進度や必要な時間が異なるため、学習途中で他者の考えや表現方法を取り入れ、自らの学びを見直す機会などを十分に設定することはできなかった。単元の最後に発表活動を位置付けたことで、他者の考えや表現方法に触れる機会は確保でき

たが、その工夫を自らの学習や発表に反映させることは難しかった。今後は、単元の途中に中間発表を設定するなど、他者の考えや表現方法との共通点や相違点を比較・検討しながら、自らの学習や表現方法を見直す機会を設定する必要がある。毎時間の振り返りを通して、自己調整を促すことはできたが、その内容を児童同士で共有し、学び合う場を十分に設定することはできなかった。参考となる振り返りも多く見られたことから、振り返りの掲示や教師による授業冒頭での紹介、ロイロノートで共有するなど、他者の学習方法や考えを参考にできるような学習環境を整備する必要がある。また、学習中に生じた疑問を共有し、互いに解決方法を提案できる交流コーナーを設けるなど、学習の途中から多様な考えを取り入れられる学習環境を構成する必要もある。教師が児童の学習方法や表現方法の工夫を意図的に紹介し、価値付ける機会を設けることが学びを見直す一助となる。

(2) 実践2 中学3年生

① 教科 数学科 「平方根」

② 学級の実態

学力や学習に対する意欲には差が見られ、自身にとって難しい問題に直面すると、解決方法が分からず学習が停滞する生徒も少なくなかった。また、一斉授業では自分の考えを伝えたり、分からないことを友達に質問や相談したりする姿は十分には見られなかった。

③ 具体的な手だて

習熟度別授業を取り入れ、生徒が自らの理解度や課題に応じて学習を進めるとともに、対話を通して多様な考えに触れながら学びを深めることができるよう、話しやすい机の配置にするなど、学習環境を工夫した。

ア 手だてAについて

生徒が自らの理解度や課題に応じた学習を進められるよう、習熟度別授業を取り入れ、「基礎クラス」「標準クラス」「発展クラス」の3つのクラスを編成した。クラスは定期テスト等の試験結果を参考に、生徒自身が選択できるようにするとともに、習熟度別学習の実施ごとに希望を確認し、学習状況に応じて変更できるようにした。

イ 手だてBについて

生徒が多様な考えに触れながら学びを深めることができるよう、各クラスの学習内容や学習形態を工夫した。基礎クラスでは、練習問題の解き方を教師のサポートを受けながら友人に発表する活動を行った。標準クラスでは、生徒同士が教え合いながら課題解決に取り組む場を設定した。発展クラスでは、生徒が課題の考え方や解法を全体に説明する活動を取り入れ、互いの考えを共有・比較しながら学習を進めることができるようにした。

④ 授業の様子

授業の開始時には、生徒自身が「基礎クラス」「標準クラス」「発展クラス」から自分に合ったコースを選択し、教室を移動して学習を開始した。基礎クラスでは、一斉授業を基本としながら、生徒一人一人の理解状況に応じて教師が個別に声掛けや助言を行い、基礎的・基本的な内容の定着を図った。平方根の導入では、図形と関連付けながら平方根の意味を考える活動を取り入れ、計算方法だけでなく概念の理解を促した。標準クラスでは、生徒同士の対話を取り入れた問題演習を中心に学習を進めた。各自が課題に取り組んだ後、「ここってどう解くの」「この式はどうしてこうなるの」など、互いに分か

らない部分を質問し合いながら解決方法を考える姿が見られた。説明する生徒も、相手の理解状況に応じて言葉を補ったり、式を書き加えたりしながら説明するなど、生徒同士が対話を通して学習を進めていた。発展クラスでは、課題を解くだけでなく、「ミニ先生」として他者に説明することを想定しながら、解き方や説明方法を考える活動を取り入れた。生徒は問題ごとにグループを作り、「どのように説明すれば分かりやすいか」「どこでつまづきやすいか」といった視点から説明のポイントについて話し合い、より分かりやすい説明方法を検討していた。授業の後半には、各グループの代表生徒が前に立ち、教師役となって問題の考え方や解き方を全体へ説明した。教師は説明の途中で「1000 倍した部分について、もう少し詳しく説明してください」と発問し、生徒は質問に答えたり説明を補足したりしながら、自らの考えを整理していた。



【問題の解説を行う生徒の様子】

⑤ 実践 2 の成果

生徒は定期試験や小テストの結果を参考に、自らの学習状況に応じて「基礎クラス」「標準クラス」「発展クラス」を選択していた。従来の 2 クラス編成を 3 クラス編成としたことで、生徒一人一人の習熟度や学習方法に応じた学習環境を構成することができた。教師との対話を中心とした学び、生徒同士で教え合う学び、他者へ説明する学びといった、異なる学習形態を設定したことで、生徒は自らに適した学習方法を選択しながら学習を進めることができた。基礎クラスでは、図形と関連付けながら平方根の意味を考える活動を取り入れたことで、計算方法を覚えるだけでなく、平方根の意味を理解しようとする姿が見られた。正方形の一边を斜めに引いて考えることで、学習シートの中に面積が 5 cm^2 の正方形を見出し、一边の長さである $\sqrt{5}$ にすぐ気付く生徒もいれば、教師との対話を通して理解を深める生徒も見られた。一人一人の理解状況に応じた支援を行うことで、基礎的・基本的な内容の定着につながったと考えられる。標準クラスでは、演習の時間とは別に、生徒同士で教え合う時間を意図的に設定したことで、自分の考えを他者に分かりやすく伝えようとしたり、他者の考えを取り入れたりする姿が見られた。答えだけでなく、式の意味や考え方について説明し合う場面も見られ、対話を通して互いの理解を深めることにつながった。発展クラスでは、全体へ説明する前にグループ内で説明方法を比較・検討する時間を設けたことで、「どのように説明すれば相手に伝わるか」という視点から自らの考えを見直す姿が見られた。教師から説明が不十分な箇所について補足を促されると、生徒は説明内容を見直し、不足していた部分を付け加えながら説明を修正していた。このことから、説明活動は知識を伝えるだけでなく、自らの考えを整理・再構成し、他者に分かりやすく伝えるために思考を深める機会となっていたと考えられる。習熟度に応じた人的環境を構成し、生徒同士の対話や説明活動を意図的に位置付けたことで、生徒は多様な考えに触れながら、自らの考えや学習方法を調整し、主体的に学びを深める姿が見られた。

⑥ 実践 2 の課題

本実践では、生徒が自らクラスを選択し、それぞれの学習形態に応じて学習を進める姿が見られた。一方で、クラスを選択する段階では、各クラスの学習内容や学習方法を十分に理解しないまま選択している生徒も見られた。各クラスの学習内容や学習方法を事前に具体的に示すとともに、ロイロノートなどを活用して事前に希望調査を行い、生

徒の選択状況を把握した上で、必要に応じて個別に助言する機会を設ける必要があった。難易度や点数だけでなく、「どのような学び方をしたいか」という視点からクラスを選択できるように支援することが重要であった。クラス選択の判断材料についても、定期試験や小テストの結果だけでなく、各クラスの授業の様子を撮影した写真や説明活動の様子、実際に受講した生徒の振り返りなどを共有することで、学習方法や学習形態を具体的にイメージできるようにする必要があった。これらの課題を改善することで、生徒自身が学習内容だけでなく、学び方にも着目してクラスを選択できるように促すことは、自らの学習を調整する力の育成につながると考えられる。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

仮説1では、児童生徒が自ら学習内容や学習方法を選択・判断し、学びを調整する場を単元に位置付けることで、主体的に学びに向かう力の育成を目指した。実践1では、単元全体の見通しをもたせるオリエンテーションシートと毎時間の振り返りを組み合わせることで、児童が学習内容や学習方法、表現方法を自ら選択・調整しながら学習を進める姿が見られた。実践2では、習熟度別授業を取り入れ、生徒自身が理解度や課題に応じて学習するクラスを選択することで、自分に合った学習方法で主体的に学習を進める姿が見られた。この姿から、学習者が自ら学習内容や学習方法を選択・判断し、学びを調整する場を単元に位置付けることは、主体的に学びに向かう力の育成に有効であったと考えられる。

仮説2では、多様な考えに触れ、根拠に基づいて比較・検討する対話の場を単元に位置付けることで、互いの考えを生かしながら学びを深める力の育成を目指した。小学校では、図書や模型、タブレット端末などの物的環境を整備したことで、児童は自分に合った方法で情報を収集し、学習成果を表現するとともに、発表活動やワークシートを通して他者の考えや表現方法に触れ、自らの考えを見直す姿が見られた。中学校では、習熟度に応じた人的環境を構成し、生徒同士の教え合いや説明活動を位置付けたことで、他者の考えを取り入れながら自らの考えを整理・再構成し、理解を深める姿が見られた。このことから、多様な考えに触れ、比較・検討することのできる学習環境を構成することは、児童生徒が互いの考えを生かしながら学びを深める上で有効であったと考えられる。

以上のことから、児童生徒が単元全体の見通しをもち、自ら学びを調整するとともに、多様な考えに触れながら学びを深めることのできる学習環境を構成することは、主体的に学ぶことができる児童生徒の育成に有効であることが確認できた。

(2) 研究の課題

一方で、児童生徒が自ら調整した学びを、他者との対話を通してさらに深めるための場の設定には課題が残った。実践1では、単元の最後に発表活動を位置付け、他者の考えや表現方法に触れることはできたが、それらを学習の調整に生かすことはできなかった。実践2では、自らクラスを選択して学習を進める姿が見られたが、クラスを選択する段階で、それぞれの学習内容や学習方法を十分に理解しないまま選択してしまった生徒もいた。今後は、単元の途中に中間発表や交流の場を位置付け、児童生徒が他者の考えや学習方法を参考にし、自らの学びを見直す機会を設定する必要がある。また、振り返りや学習の様子を共有するなど、児童生徒が他者の学び方を具体的に想像できる環境を整備することも必要である。学びを調整する場と、多様な考えに触れる場をより効果的につなげることで、児童生徒が自らの考えを見直し、学びを深めることのできる授業づくりを進めていきたい。